



歴史をめぐるフィールド・ノート : 一九九九年 七～九月、ベルリン、ポーランド

著者	柴田 育子
雑誌名	倫理学
号	17
ページ	15-39
発行年	2000-12-20
その他のタイトル	History Reconsidered:Fields Notes from Germany and Poland,July : September,1999
URL	http://hdl.handle.net/2241/10643

歴史をめぐるフィールド・ノート

——一九九九年七月九月、ベルリン、ポーランド——

柴田育子

・私たちがかくのごとく考え語るものとするれば、そのように受けとめざるをえない世界についての一般的記述となる。すなわち分析は、それが体系的になされるならば、記述的形而上学を作り上げる。

アーサー・ダンント⁽¹⁾

一 序にかえて

小説家が文学という手法を取りながら哲学を論じることにはあるし⁽²⁾、哲学の専門家がフィクションという形をとって哲学について論じることもある⁽³⁾。また思想史は哲学と呼ばれる学問の一分野であり、歴史をたどりながら哲学について論じること⁽⁴⁾は一つの手法である。少なくとも私にはそう思われる。

しかし、歴史の自己発展を論証したヘーゲルが、哲学史は「阿呆の画廊」ではないと述べなければならなかったように⁽⁵⁾、思想史を「哲学」と区別する傾向は、ヘーゲルから二世紀も経と

うとしている今日においても依然として存在する。世界中でベストセラーになり、日本でもある時期に「哲学ブーム」と呼ばれる社会現象を生み出す原因となった、ヨースタイン・グルデルの『ソフィーの世界』に対する、「哲学」世界からの批判は強く、「あれは哲学史の本であつて哲学書ではない」という批判が多く見られたことは記憶に新しい⁽⁶⁾。

思想史と「哲学」とは、それほど大きな隔たりがあるものなのだろうか？「哲学」の思想史に対する軽蔑は、「哲学」という学問が長いこと抱いてきた歴史の軽視という姿勢に根ざしているように思う。一九世紀のドイツにおいてやつと、哲学・歴史・言語・文学等を含む精神的諸現象が精神科学(Geisteswissenschaft)として成立したことを持ち出すまでもなく⁽⁷⁾、長らく、精神史と呼ばれるものの探求が「哲学」世界において軽視されてきたことは明白な事実である。

しかし実際には歴史が思想(思想を哲学と呼ぶかどうかは別の問題として残るかもしれないが)に影響を与えているのは紛れもない事実である。ここで例を挙げる必要もないだろうが、

絶対王政という専制政治に対する反発が啓蒙思想を生み、理性に基づく啓蒙思想の限界を悟ったことがヘーゲルの歴史哲学を生み出し、ナチズムに対する反省がハーバーマスの討論倫理学や構造主義を生み出し、マルチカルチュアリズムがロールズの「正義論」を生み出したのである。

社会思想史家の良知力は、一九七六年に、「四八年革命における歴史なき民に寄せて」において⁽¹⁾、民衆の声を無視している歴史学の現状を強く批判した。民衆は、大なり小なり声は発したのであるが、何かを書き残したりはしなかっただろう。しかし、文書として残っていないからといって、「学問」の対象となり得ない訳ではない、という批判である。これは、学問が現に生きているものを無視し、アカデミズムの世界として対象になりうるものだけを取り扱っている「学問」の現状に対して向けられた批判であった。

この批判は、哲学にもあてはまるように思われる。哲学は従来、アカデミズムの内部で、抽象的な一般（普遍）原理の探究と確立を目指してきた。それ故、歴史とか文学とか体験などの「個別的な事例」を蔑視する傾向を持ってきたのである。しかし状況は徐々に改善してきているように思う。それは一つには、社会学と哲学との接近である。戦後興隆してきた社会哲学は、言語や台意を媒介することによって、個別的な事例の領域にまで降りてきた。少なくとも社会哲学は、一般原理がことばや法によって現実化していると考えている⁽²⁾。

二 個別的出来事から思想を覗き見る

前置きが長くなってしまったが、以下で私が試みることは、歴史および思想を覗き見た「フィールド・ノート」の公開である。このノートは、一九九九年七月はじめから九月末までベルリンを拠点として、ドイツとポーランドに滞在した際に記録したフィールド・ノートに手を加えたものである。

ベルリンを拠点としたのは、自分の専攻領域との兼ね合いという理由からであつたが、幸運な偶然で、一九九九年は、ボンからベルリンへの首都機能移転が完成する年であり、Reichstag（国会議事堂）の完成と公開など多くのものを見る機会に恵まれた。今日では、インターネットの普及によって、日本にいないがらにしてドイツのサイトを通じて即座にドイツのニュースを手することもできるし、以前には苦勞していた原書の入手なども、オンラインでドイツの書店に注文すれば一週間もたたないうちに手元に届くようになった。もはや、留学や頻繁にドイツを訪ねる意味は無くなったとさえ言える程である。しかしやはりそうとは言えない。朝起きて現地の新聞に目を通し、テレビでリアルタイムにニュースを見て、地元ラジオを聞き、そこで生活する人と会話を交わし、地元の店で買い物をする、そうした日々の生活の中だからこそ実感できるものはとてつもなく大きい。

この滞在中に、意識的に詳細な記録を残すように努めた。こ

ここに公開したものの以外にも、Love Parade、皆既日食（あのノストラダムスの一九九九年七月で有名な）、ゲート生誕二五〇年祭、ギンター・グラスのノーベル賞受賞など様々な出来事の記録があり、滞在中の主題研究としておこなったバルト海・北海沿岸ハンザ都市のフィールド・ワークと宗教改革地のフィールド・ワークの記録などがあるのだが、本稿ではドイツの過去をめぐるパブリック・メモリーに関する「フィールド・ノート」のみ公開したいと思う。

三 ドイツ現代史の周辺

— 未来としての過去？ 現在としての過去？ —

三―(a) 新兵宣誓式と七月二十日事件

一九九九年七月二十日。ベルリン市内は、朝から警備がものものしかった。ベルリンに来てからもう二週間以上経ったが、今朝はいつもはすぐに来る電車がなかなかやって来ない。大きな通りには警官が配置されていて厳重な警備である。

七月二十日は、一九四四年に国防軍将校によるヒトラーの暗殺計画（七月二十日事件）が実行に移された記念日である。これは、ドイツ国内におけるナチス抵抗運動としてはもっともよく知られたものである⁹⁾。今年度は、この記念日に、今年度のドイツ軍の新兵宣誓式（Rekruten-Gelöbnis）が、ヒトラー暗殺計画が練られた、旧ドイツ陸軍最高司令部があったベンドラーブロック（Benderblock）で開催される。この記念式典には、

シュレーダー首相、シャーピング国防大臣、ラウ大統領ら政府首脳が出席する。ベルリンでの宣誓式は、これで三回目だが、過去の式典も大いに波乱含みであった。一九九六年のシャルロッテンブルク城での式典は、反対派によるホイッスル笛攻撃、けたたましいサイレンやロック音楽による騒音妨害によって中止に追い込まれたし、一九九八年のアレクサンダー広場の赤の議事堂での式典は、当初、社会民主党（SPD）、緑の党、民主社会党（DSU）などの野党（当時）が反対して、八月十三日から六月十日へと日程が繰り上げられ、また、式典当日に、現在の環境大臣であるトリッティン議員（緑の党）が反対デモに参加して話題になった¹⁰⁾。

しかし一九九八年十月に政権が交代したことによって、社会民主党と緑の党の連立政権は新兵宣誓式を挙行する側にまわった。またこの政権は、コソボへのドイツ軍の域外派遣を認めたのであるから、今更、新兵宣誓式に反対できるものでもない。また緑の党からは、外務大臣にフィッシャー¹¹⁾を出している。現実路線を突き進むフィッシャーは、コソボへドイツ軍がNATO軍の一員として域外派遣されるのを承認した。こうした事情から、緑の党は、連立政権に参加している立場上、公式には今回の宣誓式に反対できないのであった。

この日は、新兵宣誓式に反対する数多くの左派グループがベンドラーブロックに集結すると予想され、ベンドラーブロック脇のシュウタウヘンベルク通りでのデモは前もって禁止されていた。ただし新聞によると、二十以上の反対派グループの集

結が見込まれているそうである(Die Welt, 17. Juli. 1999)。また、大がかりな抗議行動を想定して、ベンドラーブロック周辺だけで一六〇人の警官を配備し、この式典には三九万マルクの支出が想定されているという(Die Welt, 21. Juli. 1999)。

現在のドイツは、社会民主党と緑の党の連立政権である。この政権は、一九九八年十月に、それまで十八年間政権の座にあったコール保守連立政権に代わって誕生した。ドイツの社会民主党は現実路線を歩み、「保守のキリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU)とぶつが違うのだ?」、「ドイツにはもはや左派は存在しない」と擲論されながらも政権を司り、税制改革などで成果をあげている。

その後、何回かこの宣誓式の模様をテレビのニュースを見た。研修先でいろいろな国から来た人たちと一緒に宣誓式のニュースを見た折、兵士による軍隊式のものものしい行進と敬礼、ドイツ国家の斉唱のシーンで、ドイツ人のRが思わず、「furchbar」と呟やく。Rによれば、「ドイツの歴史があふれんばかりに頭の中にぎっしりと詰まっていて、それを想起させる国歌はともじやないけれど歌えないし、ドイツ国旗もナチス時代を連想させるからあまり好きではない」と言う。この感覚は、国歌や国旗をナシヨナリズムに基づくものとして嫌う、少なからぬ日本人の感情と同様のものである。他方、アメリカ合衆国やトルコ、ブラジルから来た友人たちは、国旗と国歌に敬意を払わないそうした姿勢が全く理解できないようである。アメリカ合衆国のように、国旗を国家の絶対的なシンボルと見なし公立の小

学校では毎朝クラスで国歌を斉唱する国や、カナダのように国旗バッヂや国旗のついた商品が目立つ国があり、日本やドイツのような国がある。

また新兵宣誓式は、ドイツの過去に対する問題に絡めた武力増強に対する反対のみならず、ドイツ国内における徴兵制の問題とも関わっている。ドイツでは兵役法に基づき、十八歳以上の成年男子に二五歳までに十か月の兵役(Wehrdienst)が義務づけられている。兵役の代わりに十一ヶ月の代替社会奉仕(Zivildienst)を選ぶことも可能で、研修先でもZiv. (Zivildienstに從事する人)が、こまごまとした事務手続きや電話番、郵便の仕分け、お茶の世話などをしてくれる。日本でも介護保険制度の導入(二〇〇〇年)でドイツの介護保険制度が先例として参考にされているようだが、ドイツの在宅介護医療の人材となっているのは、良心的兵役拒否者であるZiv.たちである。現在政権の一翼を担っている緑の党、旧東独共産党の後継政党であるPDSは徴兵制に反対しているが、SPDやCDU/CSUは反対していない。また、ドイツでは女性の兵役を男女平等の基本原則に基づいて認めるべきであるという訴訟もなされている^⑩。

三―(b) 首都ベルリンの姿

―ポツダム広場、Lehrterbahnhof, Reichstag―

首都ベルリンの骨格が徐々に出来上がりがつつある^⑪。このためベルリンは「ヨーロッパの工事現場」と呼ばれ、至る所で建

設工事の音がきこえる。行政機能の中核となるのは、互いに交差するウンター・デン・リンデンとポツダム通り沿いと、そこからポツダム広場に至る一帯である¹⁰⁾。

まず、ポツダム広場 (Potsdamer Platz) のあまりの変貌ぶりには本当に驚かされた。立ち並ぶ大型ビルと通勤時の交通渋滞を見て、東京にいるのかと錯覚しそうになった。一九九五年にここを訪れた時は更地であった場所に次々と近代的な巨大ビルが建っている。ポツダム広場は、新生ドイツの中核として、目下、日進月歩で整備が進んでいる。ポツダム広場は、かつては長らくベルリンの中心だった場所である。ポツダム広場は、フリードリヒ大王の時代から、普仏戦争後の悲願のドイツ統一、所謂「黄金の一九二〇年代」、ナチス時代のベルリン、などまさに歴史の証人として、ドイツ史の中心につねに位置していた¹¹⁾。ポツダム広場から出ているポツダム通りは、皇帝の住まいがあるポツダムへと通じる道という意味である。サン・スーシ宮殿のあるポツダム市には、「もう一つの」ブランデンブルク門がある。ベルリンのウンター・デン・リンデンのブランデンブルク門が入り口ならば、ポツダムのブランデンブルク門は出口であり、あるいはその逆である。しかしポツダム広場は、第二次世界大戦で完膚無きまでに破壊されて廃墟となり、また、その後築かれたベルリンの壁のまさにど真ん中に位置していたため、壁の周囲は死罪地帯 (Todesstrafezone) に属し、廃墟が廃墟のまま残され、長らく昔日の面影を取り戻すことはなかった。しかし一九八九年にベルリンの壁が崩れ、ベルリンが統一ドイ

ツの首都になり、更に一九九九年の九月に連邦議会を含む首都機能のほとんどのベルリン移転が完成し、ポツダム広場も今まさに歴史の表舞台に復帰しようとしている。既に、ポツダム広場の周辺には既に巨大なショッピング・アーケードがオープン¹²⁾、Daimler-Benz City, Sony-Center, ABB-Areal などの大企業の建物が建造中である (Benz City は一九九八年十月に既にオープン)。これは、世界を代表する建築家たちが設計したモダン建築の粋を集めたような建物である。恵比寿ガーデンプレイスや幕張新都心の一角をイメージすると分かりやすいかもしれないが、ここは職場・居住空間・ショッピングセンター・公共施設・文化施設などが一体化した近未来型の建築様式を指向している。

ポツダム広場は、文化地区としての体裁も整えていて、近くにはハインリヒ・ハイネの名前を冠した地下鉄の駅 (Heinrich Heine-Str.) が新たに造られ、ベルリン・フィルハーモニーや Kultur Forum, 絵画館 (Gemälde Gallery)、国立会図書館などが並び立つ文化地区も隣接している。

その余りの新しさが、昔のポツダム広場の歴史を知る人や長くベルリンに住んでいる人たちにはなかなか認めがたいものであるらしい。新ポツダム広場に対する批判をずいぶん耳にした。確かにここには昔日のベルリンの姿を連想させるものは何もなくなってしまった。しかし、ベルリンはもはやE.Uの中心としても、あるいはヨーロッパの政治を左右する場所としても、世界の代表的な都市の一つなのであり、こうした近代ビルの建造

は国際都市の必然と思える。

Reichstag^③ (国会議事堂) がついに完成し、八月から連邦議会も開かれ、一般公開もされてゐる。Reichstag は、一九九九年のベルリンへの首都機能完全移転に際して、ドイツ連邦議会場として、イギリス人の著名な建築家 Norman Foster によって再設計された。ブランデンブルク門の隣に立っている Reichstag は、やはりベルリンの壁の境界線上に立っていたため、建物の後方に地雷が埋め込まれるという立地条件にあつて、長らく有効利用されてこなかった。

Reichstag をめぐる歴史的に有名な場面のいくつかが思い浮かぶ。一九三三年二月のナチスの政権獲得に際しての国会議事堂放火事件 (Reichstagsbrand)。第二次世界大戦末期、ベルリン攻防戦の後に、ソ連軍の兵士がそのてっぺんに登り、ソ連の旗を掲げているベルリン陥落の場面 (一九四五年四月三〇日)、ドイツ統一の日 Reichstag の後方から打ち上げられた花火の場面 (一九九〇年一〇月三日) などである。第二次世界大戦後ベルリンにいち早く乗り込んだソ連は、戦勝四か国によって分割統治された際にも最も多くの領土を獲得し、それが後にベルリンの壁建設につながっていった。

一九九三年に初めて Reichstag を訪れた際は、建物自体がすでにいて、周囲には人影もまばら、その隣で店開きしていた旧東ドイツ駐留ソ連軍兵が所持していた帽子やパスポート、バッチなどを販売する露店ばかりが目立っていた。一九九五年夏に

ベルリンを訪れた際は、クリストとジャン・クロードが Reichstag を白い布で梱包するというあの有名な野外セレブニーが終わったばかりで、Reichstag の再生は、ベルリンの復興の象徴として、世論から好意的に認識されていた。そして統一ドイツの国会議事堂という今日の姿に至る。Reichstag の一般公開は、夜遅くまでなされていたので、気が向くと夕方にぶらぶらと出かけていった。気分の良い夏の夕方に出かけていくと、持ち物検査のために長い行列ができていて、三十分も並ばなければならぬこともあった。

建物の正面入口にはめこまれている Dem Deutschen Volke という字型はそのままだ残されている。これは、第一次世界大戦の敗色が濃厚となってきた帝政末期の一九一六年に、立場の弱まった皇帝ヴィルヘルム二世が、掘らせたといういわく付きの字型である。ナチス時代を経て、さまざまな意味に解釈される難しい表現なのだが、このままだ残されていた^④。建物そのものは大きくリニューアルされていて、議会の透明性を示す開放的なガラスドームを特徴としている。眺めの良い屋上に至るまでに螺旋階段を延々と登り、その途中で議場を眺めることができる。

この Reichstag からほど近いところに、将来のベルリンの中心駅として現在レールター駅が建設中である。これまでのベルリンの鉄道網は、西ドイツ方面から来る列車は、動物園駅に到着。東ドイツ及びポーランドやチェコなどの東ヨーロッパから来る

列車は、リヒテンベルク駅かベルリン東駅（旧ベルリン中央駅）の発着で、両駅の間はSバーンで三十分もかかりとても不便であった。しかしこれらの駅の規模では、ICやICEなどの絶え間ない発着はどう考えても不可能であり、今後のICE網の拡大を見越した上で、それに対応可能な巨大な新駅としてICEターミナルを持つレールター駅が建設されているのである。将来的にはベルリンの新空港と連結も見込まれており、二〇〇五年までの完成を目指している。動物園駅（旧西ドイツ）からアレクサンダー広場駅（旧東ドイツ）という二つのベルリンの中心地を結ぶSバーンに乗ると、この新駅の建設工事の様子を見ることができる。

三（c）東西分裂五十周年展

Einigkeit und Recht und Freiheit Wege der

Deutschen 1949-1999

ドイツが東西に分裂したのは一九四九年であり、一九九九年はその五十周年にあたる。それを記念して、五月三日から十月三日まで、ベルリンのMartin-Gropius-Bauで、戦後ドイツに関する資料を集めた展示会Einigkeit und Recht und Freiheit Wege der Deutschen 1949-1999が開催されている。この資料展示会は、費用の大半をドイツ政府が負担したらしく、入場料は無料である。私も七月末にそこへ出かけてみた。Sバーンのアンハルター駅が最寄りの駅なのだが、このあたりもかつて東西を分け隔てていた壁があった場所である。Martin-Gropius-Bau

にしても、道を挟んだ向い側は旧東ベルリンで、こちら側は旧西ベルリンであった。ここは、ポツダム広場やウンター・デーン・リンデンからもそう遠くない場所なのだが、地区的にはクロイツベルクに属し、まだ再開発に至る前段階のようで、ポツダム広場周辺（地区的にはMitteに属する）に比べると静かな印象を受ける。

この展示会に關して、これだけ資料をまとめて展示したことは評価してよいだろう。入場料も無料であることに、ドイツ政府のドイツ現代史を人口に膾炙させようとする姿勢も感じられる。しかし、ちよつと疑問に感じた点もあった。ニュルンベルク裁判に関する展示はよいとしても、ユダヤ人が強制収容所に連行され連合国に解放されたという歴史の経緯については、一九四九年以降の歴史をテーマとする展示会で、果たしてここまで詳しく展示する必要があるのだろうか？もちろん、ドイツの敗戦と連合国によるベルリンの分割統治が東西ドイツの誕生を招いたのだから、この歴史はとても重要である。しかし、この歴史はインパクトが強すぎるため、他の歴史と混ぜてしまうと関心がこれにばかりに向いてしまう。この歴史については、別個に取り上げた方がよいのではないかと思った。もつともこれは、現在議論がやまないホロコースト警告碑建設の問題とも絡んでいて、現在のドイツ政府にとっては欠かすことの出来ない展示なのかもしれない。それ故、これもこの五十年史の付随的なテーマであるにしても、公的な歴史認識の重要性を鑑みたドイツ政府の姿勢であるならば評価すべきなのだろう。

この展示会では、この五十年のドイツ史が三九のブースに分けられて展示されてあった⁽⁸⁾。敗戦後のドイツと基本法の制定からはじまり、西側のドイツと東側のドイツのそれぞれの日常生活と国家体制、今日のドイツ統一に至るまでの過程である。今日のドイツ連邦共和国が西ドイツの伝統に沿っているのだからやむを得ないであろうか、西ドイツの展示がどうしても多くなってしまっているように感じた。

その中でも、一九六〇年代末から一九七〇年代はじめの学生運動に関する展示が目を惹いた⁽⁹⁾。学生運動の指導者で、後に銃撃事件で重傷を負ったドゥチュケ (Rudi Dutschke, 1940-1979) が着ていたセーターが印象的であった。今日、ドイツの政治をリードしている政治家の主要メンバーはみなこの一九六八年世代 (Die 68er) である。現首相のシュレーダーが一九四四年生まれ、国防大臣のシャーピングは一九四七年生まれ、政権内部の対立から大蔵大臣を辞任しシュレーダーと袂を分かったSPDの中心的指導者ラ・フォンテーヌが一九四三年生まれ、外務大臣のフィッシャーは一九四八年生まれである。政治家ではないが、今年日本語訳が出版されベストセラーとなった『朗読者』の作者ベルンハルト・シュリンク (本業は法学者) も一九四四年生まれで、この作品では、六八年世代が、親の世代の罪、つまりナチズムに対して沈黙しそれを黙って見過ごした罪との対決がテーマの一つになっていた。

また三九のブースとは別に、正面の入口を入ったところのラウンジでは、シュテフィ・グラフ、ボリス・ベッカー、フラン

チェスカ・ヴァン・アルムジックなどのドイツの有名人が、東西ドイツの統一をどのように認識しているかについての秀逸なインタヴュー番組が放映されていて、とても興味深く眺めた⁽¹⁰⁾。とにかく現代史の展覧会というのはなかなか難しいものだ。どうしても歴史解釈、歴史認識の問題がそこには絡んでくる。政治、とりわけ政府の歴史解釈がどうしても展示会には反映してしまう。パブリック・メモリーの問題がここには横たわっている。

後日、資料収集のため政府組織である Bundeszentrale für politische Bildung⁽¹¹⁾ に行く際、再度、アンハルター駅で降りた。ポツダム広場や Reichstag からそう遠くないまだ発展途上のこの地域は、ここは今後どのような発展を遂げていくのだろうか？

三 (d) イグナツ・ブービス死去

「パブリック・メモリーをめぐる論争の再燃?」
一九九九年八月十三日、ドイツユダヤ人評議会会長、イグナツ・ブービス (Ignatz Bubis) の死去が報じられた。七二歳だった。ブービスの死をめぐる報道は、その後もしばらくの間、継続した。その内容は、ブービスの生前の希望によりイスラエルに埋葬されることになったこと、その理由がドイツで埋葬されると過激な右派勢力によって墓を荒らされるからだという知人の証言、テル・アビブで行われた葬儀にはドイツのラウ大統領、イスラエルのヴァイツマン大統領、シモン・ペレス元首相

などの要人が出席したこと、埋葬後その墓碑が *Mendelssohn* というドイツ・ユダヤ系の由来を持つ芸術家によって黒い塗料で荒らされたこと、犯人の *Mendelssohn* は、黒はブービスの汚い過去を示す染みであると述べその行為を全く反省していないこと、というものであった。

ブービスは、とりわけ、マルティン・ヴァルザーとの間で一九九八年十月にはじまる、ナチズムの過去に関するドイツのパブリック・メモリーをめぐる論争、それにはベルリンのホロコースト慰霊碑をめぐる問題も関わっていた「ブービスVSバルザー論争」で知られる。

かつては共産党にも属し左翼知識人として知られていたマルティン・ヴァルザーの近年の右傾化は既に指摘されていたことだが、この論争は、そのヴァルザーがドイツ文芸界で最も権威ある賞といわれるドイツ出版平和賞を授賞し、フランクフルトのパウロ教会で行われたその授賞講演（一九九八年十月十一日）での発言に端を発している。問題となったのは次の箇所である。少し長いが引用してみよう。

（前略）時々私は告発によって攻めを受けることなしにはもうこれ以上直視できない場面に出会うときに、メディアにおいてもまた告発のルーティンが成立しているのだ、と私自身の免責のために思い込まねばならないほどだ。強制収容所を取り扱っている気の重くなるテレビの連続シリーズを見ていて、私はおそらく二十回は目をそらしただろう。誠実な人間はアウ

シュヴィッツを否定しないし、さらに責任能力のある人間はアウシュヴィッツの残酷さについて言い訳をしたりしない。しかし、メディアによって毎日こうした過去を突きつけられると、われわれの恥に関する絶え間ない上演に対して抵抗しようとしている自分に気付くのである。われわれの恥の終わることのない上演について考える代わりに、私は目を反らし始めるのである。抵抗している自分に気付いたとき、私はわれわれの恥の持続をその動機から試問しはじめる。そして私は、その動機が、忘れてはならないという考えに基づくのではなく、現在の目的のために恥の道具化からなされたことが分かって、嬉しくなるほどののである。それはつねに良い尊敬すべき目的である。しかしそれはやはり道具化である。

（中略）大胆に言わせてもらえば、アウシュヴィッツは、いつでも使用可能な威圧の手段や道徳の棍棒、あるいはまた単なる義務演技といった荷しのルーティンになるには、適していないのである。しかし、ドイツ人が今や全くふつうの民族であり、ドイツは全くふつうの社会であるという人がいたら、その人はどんな疑いをかけられるだろうか？

ベルリンのホロコースト慰霊碑をめぐる議論について、後世の人々は他者に対する責任感を感じている人々が何をしでかしたかを知り得るだろう。それは、サッカー場の悪夢でもって首都のど真ん中をコンクリート化すること、つまり恥のモニュメント化である。歴史家のハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラーはこれを「否定的なナシヨナリズム」と名付けた。「否定

的なナシヨナリズム」はたとえどれほど良いものになろうとしたところで、それとは反対に全く良いものになどなり得ないのだ。大胆に推測するなら、おそらくそこにはまた善行の陳腐化が存在するのである⁸⁰。

このように、ヴァルザーがアウシュヴィッツを繰り返し言及することをアウシュヴィッツの手段化 (Instrumentalisierung) と呼んだこと、さらにベルリンに作られるホロコースト記念館と慰霊碑を「サッカー場の悪夢」(ein Fußballgedroßer Alptraum)、「恥のモニュメント化」(die Monumentalisierung der Schande)と発言したことが問題となり⁸¹、また長らく議論の的になっていたドイツ人の「普通化」(Normalisierung)について言及したことも問題とされた。

この発言はさまざまな議論を引き起こし、大きな社会的反響を呼んだが、ヴァルザー批判の先頭に立ったのがブービスであった。彼は道徳的観点からホロコーストをめぐるパブリック・メモリーの重要性を終始指摘した。ブービスの立場は、ユダヤ人団体の代表として、「アウシュヴィッツの嘘」という表現でよく知られている歴史修正主義者と結びつく可能性に対して警告を発するという責務も負っていた。ブービスの発言を引用する。

(前略) この恥部は実際にかつて実在したこのなのであり、忘れ去りたいと欲したからと言って、消えるものではない。も

し今日的な目的のためにアウシュビッツが手段化されていると思う人がいるのなら、それは「精神的な放火」(„geistige Brandstiftung“)である。こうした類のことは右派の政党指導者がよく用いる主張である。そのような言説や主張は極右によるものであることを、社会はよく知っている。ところが、共和国の精神的支柱と見なされている人がこうしたことを言い出したのなら、それは全く違った重みを持っている。フレイやデカートを引き合いに出す人が誰なのか私は知らないが、確信を持って言えることは、極右は今やヴァルザーを引き合いに出すということである。ヴァルザー氏や他の連中が、彼らの安定を脅かされない、彼らの精神的自由を見い出せる、彼らにとって道具化の印象が生まれえない、という理由のためだけに、われわれは恥の映像を示すことを断念などできないのだ⁸²。

この論争を通じて、論争のきっかけを作ったヴァルザーの発言はあまり多くなかった。あえて沈黙を守ったとさえ言えるほどである。ヴァルザーの代わりに、ヴァルザー陣営に立つて発言した元ハンブルク市長エルンスト・フォン・ドナニーの積極性は目立っていたが、ヴァルザーの発言はそれほど多くない。発言の回数はあまり多くなかったが、十一月二十六日のデュイスブルク大学での講演でヴァルザーは、彼に向けられた批判に対して反論した。その内容は、フランクフルトでの講演以後彼に寄せられた手紙に關することやヴァルザーを批判したブービスとWelt紙の記事に対する批判であり⁸³、内容的にはフランクフ

ルトでの発言と重複する箇所も多かった。ただし、ヴァルザーの発言の趣旨は、次のような発言にあらわれているだろう。「戦後世代にとっては何が、そうした良心探求の対象となりうるのか?」、「私は数週間外出してある長編小説を朗読した。その小説の最も重要な章の表題は、現在としての過去、である」。

ヴァルザーはホロコーストを否定するわけではないが、彼の言葉の端々に、ドイツの負の歴史についてはこれ以上話題にされたくないという意図を感じてしまう。これが道徳的な観点を重視するブービスには我慢がならないものらしい。ブービスは、十一月三十日付けのシュピーゲルのインタヴューで、「私はマルティン・ヴァルザーの行間から反ユダヤ主義を感じ取る」と述べてヴァルザーを再批判した⁽⁹⁾。

この論争は、その後もヴァイツェッカー元大統領やヘルツォーク大統領(当時)によるブービスの立場に共感を示す発言⁽¹⁰⁾、新聞や雑誌に寄せられた多くの投書、知識人の公開書簡など、パブリック・メモリーをめぐって大きな盛り上がりを見せた。一九八〇年代半ばのドイツの公的な歴史認識をめぐる歴史家論争以来⁽¹¹⁾の大論争となったのである。しかし頑なとも思えるのヴァルザーの発言の少なさと、ブービスの死はこの論争を過去のものとしてしまったようである。ピーター・ゲイが指摘するように、ブービス亡き後でわれわれは少なくともこの論争におけるヴァルザーの発言についてはもはや騒ぎ立てるべきではないだろう⁽¹²⁾。

ただし、この論争で話題になったパブリック・メモリーの問

題は今後も論じられていくだろう。歴史は解釈されるものである。歴史認識とは、現代を生きる人が過去の歴史を解釈することから生まれる。ブービスの死の報道によって、パブリック・メモリーについて考える機会が再び与えられた。

三―(e) ベルリンにあるユダヤ人迫害を悼む碑

三ヶ月間ベルリンに滞在している間に生活の場としていたのは、ヴィルマースドルフ(Wilmersdorf)という地区だった。途中で一度滞在先を変えたが、そこも、前の滞在先から五分もかからない場所だった。最寄りの駅は、地下鉄のベルリーナー通り駅で、グンツェル通り駅とシェーネベルク地区に属するバイリッシャー広場駅も歩いていける距離にあつた。バイリッシャー広場駅の近くに郵便局があり、書籍などの重い荷物を日本に送り返すのによく利用していた。

その郵便局から滞在先の家に戻る道すがらのミュンヘナー通りを中心とする Bayisches Viertel 一帯の電柱には、一九三三年から四五年のナチス・ドイツの時代のユダヤ人迫害を悼む八十枚の銘板が掲げられてある⁽¹³⁾。いずれも日付付きの銘板で、例えば、「ベルリンのユダヤ人は食料を午後四時から五時の間だけ購入することが許された。一九四〇年七月四日」とか、「ユダヤ人獣医の開業が禁止された。一九三六年四月三日。ユダヤ人はそれ以外の一般職に就労することも禁じられた。一九三九年一月十七日」、「ドイツ市民とユダヤ人との婚姻と婚姻外の関係は、刑罰に処せられた。既になされている結婚も無効とされた。

一九三五年九月十五日」、などというものである。

ヴィルマースドルフ地区とシェーネベルク地区の境界にあるこの Bayersches Viertel は、クーダムやポツダム広場などのベルリンの中心部にほど近い高級住宅街である。通りを歩いているとクリニック、弁護士、歯科医、心理療法師の開業の看板が目につく。戦前はこの地区に、医者や官僚、大学教授、弁護士、貿易商などを生業とする多くのユダヤ人が住んでいた。しかし一九四一年にこの地区のユダヤ人が大量に収容所へと連行 (Massendeportationen) されていたのである。それを悼む警告碑である。

ベルリンのブランデンブルク門のすぐ脇に、ホロコースト慰霊碑を建てること⁽⁸⁾が賛否両論を含む大論争を巻き起こしたのは記憶に新しいが、ベルリンには、ユダヤ人迫害を悼むたくさんの記念碑や警告碑 (Mahmal, Mahmal) がある。ベルリンの Die wichtigsten Gedenkstätten und Mahnmale というインターネット・サイトをみると⁽⁹⁾、実に七十箇所の警告碑地が記載されている。

懸案のホロコースト碑が完成すれば事情は異なるだろうが、現在のところ、ホロコーストに対する警告碑としてもっとも有名であり目に付きやすいのは、地下鉄のヴィッテンベルク広場駅前にある警告碑であろう。ベルリンの目抜き通りであるクーダム通りを、有名なカフェ・クラutzラーからヴィルヘルム二世記念教会を通して、さらにヨーロッパ・センターを経て、有名なデパートである KadeWe の前を通り過ぎヴィッテンベル

ク広場に立つとこの碑が目飛び込んでくる。そこには次のように書かれてある。

私たちが決して忘れることのできない戦慄の場所、アウシュヴィッツ、マイダネック、トレ布林カ、テレジエンシュタット、ブーヘンヴァルト、ダッハウ、ザクセンハウゼン、ラーベンスブリュック、ベルゲン・ベルゼン、トロステネッツ、フロツェンビュルク⁽¹⁰⁾

ごく普通の人々は、このようにして歴史と出会うものかもしれない。しかしこのような警告碑の是非についてもさまざまな意見がある。ブービスのように、警告碑の必要を訴える識者もいるし、ドイツ系ユダヤ人でアメリカ在住の文化史家ピーター・ゲイは、ホロコースト警告碑やヴィッテンベルク広場やベリッシャー広場の警告碑を「あれはとても印象深いものである。でも私はあの警告碑が建っている意味を全く理解できない。私は、人はその義務感から自分の思い出を記録しているとは思わない。少なくとも私は、私の思い出を書き記すということには殆ど興味がなかった。それはあまり心地よいものではない」⁽¹¹⁾と述べ、『朗読者』の作者シュリンクは、「私にとってホロコースト記念碑(ユダヤ博物館)は、ただそこに建っている空虚なものにすぎない。石柱の森 (Stelenwald) を設計することは必要のないことである。テロ行為を防ぐために柵が作られ、犬を連れた警官によって監視され、夜になれば照明灯の下にすべてが

照らし出されなければならないというのは、バカげた考えである」と述べている⁸⁰。

通常われわれ一般人は、新聞の記事で、歴史家論争やヴァルザーVSブリス論争に対する見解を知ることがあっても、日常生活の中でホロコーストのことを日々、考えながら生きているわけではもちろんない。もちろん、ヴィッテンベルク広場の警告碑にしても、多くの人がここは気にも止めることなくこの碑を通りすぎて行くのだが、私のような短期滞在者や旅行者にとってはそうではない。研修先で何人もの外国人から、あのクーダムのはずれにあるホロコーストの警告碑はあんな場所にあるなんて驚きだ、という台詞を聞いたし、私自身もヴィッテンベルク広場を通る度に、思わず顔を上げてしまうのであった。

四 アウシュヴィッツ・ビルケナウを訪ねて

ぼくはまだ強制収容所というものを見たことがなかった。自分の頭の中にある書き割りを、現実と置き換えたかったのだ。

ベルンハルト・シュリンク

『朗読者』第一部十四章

四―(a) 強制収容所⁸¹、ある種の違和感

記憶とは何か？証言はどこまで意味を持つのか？証言は確固たる証拠ではないから学問的には意味をなさないのである⁸²？また

記憶が、パブリック・メモリーとされた場合はどうなのか？公的な認識は、いかにしていかなる基準に基づいて決定されるものなのか？歴史を取り扱う限り、こうした問いは避けて通ることができない。

日本語訳が、二〇〇〇年四月に出版され、瞬く間にベストセラーになったベルンハルト・シュリンク『朗読者』の中に、主人公のミヒヤエルが強制収容所を訪問する印象的な場面がある。

当時の僕は、敷地に囚人と看守たちが大勢いる様子を想像し、人々の苦しみを具体的に思い描こうとしたけれどうまくいかなかった。ぼくはほんとうに努力してみたのだ。一棟のバラックを眺め、目を閉じてそのバラックが何棟も何棟も並んでいるところを想像した。バラックの大きさを測り、パンフレットの数字から人口密度を割り出してみても、それほど窮屈だったかを考えてみた。バラックのあいだの階段が点呼の場所としても使われていたことを知り、階段を眺めながら下の端からてっぺんまで囚人の背中で埋まっている様子を思い浮かべようとした。しかし、想像力はうまく働かず、ぼくは惨めな、恥ずかしいような気持ちになったのだ。

初めての訪問の際、ぼくは強制収容所の敷地内を終了時刻が来るまで歩き回った。それから、収容所の上方にある記念碑の下に座って、敷地を見おろした。自分が空っぽなを感じた。まるで、外にはなく自分の内に経験を探し求めて、何も見つ

からないと気づいたかのように。(第一部十五章^四)

Bernhard Schlink の *Der Vorleser* は、このベルリン滞在中に何人かのドイツ人から勧められて購入し、日本に戻ってから本格的に読んだ。ナチスの罪責に向かい合った、学生運動世代(六八年世代)の苦悩を描いているこの作品を、ドイツのおけるパブリック・メモリーの問題と絡ませて考えながら興味深く読んだ。特に、ここで引用した、主人公が強制収容所を訪問する場面が印象に残った。

私はこれまでに四カ所目の強制収容所を訪ねた。そして、そこを訪ねるたび、ここで引用した『朗読者』の主人公ミヒャエルと同じような感覚を味わってきた。しかしそれは、恐らく自分が、傍観者であるために感じる違和感なのだろうと思ってきた。つまり、私はドイツ人ではない。傍観者としてここを訪れるかぎり、こうした違和感は当然のもののだと、それを前提にしてきたように思う。したがって私の違和感は、書物や映像でしか知らなかった世界が現前に広がっているという違和感なのだろうと思ってきた。『夜と霧』、『ソフィーの選択』、『シンドラーのリスト』などポヒュラーなナチスの強制／絶滅収容所を取り扱った映画、ナチス・ドイツの犯罪を取り扱ったドキュメンタリー映像、歴史の教科書でみた写真、それらがわれわれに想像力を喚起させ、そのイメージを与え、それまでのイメージを補い、恣意的な空想を働かせるのだろうと。

もちろん、そうした側面はあるだろう。しかし、『朗読者』

を読んで、ドイツ人でも類似の違和感を覚えるのだと思つて、少し驚いた。また『朗読者』には、冬に再度ナッツヴァイラーIIシュトリュートホーフ強制収容所を訪れた主人公が、訪問の後で昼食を食べようと思つてレストランを探すことを恥じらう場面も登場する(第二節十五章)。今回、私も、ベルリン近郊のザクセンハウゼン強制収容所を訪れたが、その日は七月下旬の特別に暑い日で、収容所を数時間歩き回った後で疲れ切つてしまい、収容所のゲート脇にあるインビスでビールを飲んでのどを潤したのだが、それが何となく恥ずかしい行為のような感じがしたし、ザクセンハウゼン強制収容所がある旧東独の小さなオランニエンブルクという街にも当然のことながら通常の生活の営みがあつて、強制収容所の近くに暮らしている若者らしき人の部屋からガンガンにロック音楽が流れていたことも、この街の一時通過者に過ぎない私にはなんとも違和感があつたのである。その後アウシュヴィッツ絶滅収容所に行き、そこを三時間歩き回った後で、敷地内にある喫茶店でコーヒを飲んだ際にも、やはり何となく躊躇われる感じがした。

これと同じ感覚は、どうやら他の人にとつても共通のものであるらしい。一九九六年にはアウシュヴィッツ収容所の向かいに郊外型スーパーマーケットが建てられるという計画が、抗議行動によつて中止させられたし、今年二〇〇〇年にもアウシュビッツ収容所の近くにディスコを作る計画が、一度決まったにもかかわらず反故にされた。また少し前のことであるが、一九八四年に、アウシュヴィッツにカトリックのカルメル会女子修

道院が収容所で殺された人々を追悼するために作られたが、論争の末に退去させられた。これらを中止または閉鎖に追い込んだのは、直接的にはポーランド内外のユダヤ人団体の猛反発であるが、類似的感覚を抱いている人が多いからこそ行政が動き出したのである。

こうした騒ぎに対して、アウシュヴィッツまで連れて行ってくれたポーランド人運転手が言っていた「スーパークらい作ってたって良いだろうに」という台詞や、若いポーランド人が「私たちはここで生活しているのだから、楽しみだって必要なのよ」とコメントの方が、実際にそこで暮らしていない私には少数意見であるように感じられた。

強制収容所の風景は実際に、静かなあまりにも静かなものがある。強制収容所に来ると人は皆、無口になる。それはそこにあるバラックとか展示品がわれわれに言葉を失わせるだけではなく、知識としてわれわれに詰め込まれているイメージが言葉を失わせるからであろう。収容所のバラックなどは、戦争末期の混乱で焼失したものが多く、そうした場所は平地になっている。そして残されたバラックは、後になって収容所内に建てられた慰霊碑や展示館と共存しているのだから。

四―(b) アウシュヴィッツへのルート

話が前後してしまったが、一九九九年九月にポーランドを訪れた際、アウシュヴィッツ絶滅収容所と第二アウシュヴィッツと呼ばれるビルケナウ絶滅収容所を見学した。

ポーランドの古都クラクフからアウシュヴィッツ（ポーランド名オシフィエンチム）までは距離にして約五十キロ、車で行くと一時間半程である。駅前から出るバスもしくは借り上げたタクシード目的地まで行くことができる⁸⁰。アウシュヴィッツ訪問はクラクフの観光業界にとっては重点商品の一つなので、クラクフのホテルから毎朝必ずツアーが出ているし、駅前の客引きタクシードは観光客を捕まえては「アウシュヴィッツに行かないかい？」と声をかけてくる。タクシードを借り上げてアウシュヴィッツとクラクフを往復しても二百ズウォティ（ズ・一九九九年末のレートで「ズ」約二五円）であり、日本の物価感覚からいえばとても安く感じられる。私は当初バスで行くつもりであつたが（バスだと「ズ」でやはりかなり安い）、旅行ガイドブックに載つてあつたバスの時刻表が古いものだったらしく、早朝のバスに乗り遅れクラクフ駅前のバスターミナルで腹を立てているところを、客引きのタクシード運転手に声をかけられた。値切つて「60ズ」にしてもいい、タクシードに乗り込むと、運転手は客をつかまえられなければどこかに小旅行にでも行くと思つていたのであるか、助手席には奥さんが乗つていた（ちなみにもこの150ズの契約は収容所を三時間半でまわるといふもので、後で一時間追加したので200ズという相場の料金が落ち着いた）。

どこの強制収容所でもそうなのだが、当然のことながら強制収容所は街中にはない。そもそも、収容所を街中に作るはずなどないのだ。ローカル線しか停車しない駅から、さらに何キロ

も歩いて、やっと収容所たどり着く。ワイマール近郊のブーヘンヴァルト強制収容所は、ワイマール駅から五キロ離れていたし、ルドルフ・ヘスが勤務したこともあり、告白教会の牧師ニーマラーがヒトラーの囚人として一時収容されていたザクセンハウゼン収容所はベルリン市街から遠く離れたオラニエンブルクというSバーンの駅からさらに二十分ほど歩いた場所にあった。

農業国ポーランドを実感させるような田園風景を時速八十キロで一時間半も走りやっとアウシュヴィッツ絶滅収容所に到着した。大型バスが並んでいる収容所前にある駐車場の巨大さにまず驚く。

駐車場から強制収容所の入り口までは運転手が連れて行ってくれた。入り口まで来ると「ここからMuseumだよ」と彼が言った。「Museum?」と聞き返し、私は展示館でもあるのかと思いい、ポケットに手を入れて、「入場料はいくらですか?」と彼に尋ねた。「料金? 料金なんかからないよ」と彼は言った。そうなのだ、アウシュヴィッツは収容所全体がMuseumというのだ。この敷地内にあるすべてが人類のある歴史に関する展示物なのである。

運転手の妻は、決して車を降りてしようとはしなかった。ビルケナウでもそうだった。彼女は夫ともほとんど会話をしなかった。運転手もMuseumの入口前で立ち止まり、決して中には入ってこようとはしなかった。ビルケナウ収容所でも彼は私を入り口のままで連れて行ってくれて、あそこへ行け、ここへ

行けと細かい指示をしてくれたものの、自分は決して収容所内に足を踏み入れようとはしなかった。彼は私のような旅行者を連れて何度もここに来ているのだろう。楽しくもないこの場所です、売店もなく時間をつぶす場所も全くないここで、何時間も車の中で客が帰ってくるのを待ち続ける。それを想像するだけで、いくら仕事とはいえ、耐え難いものがあるだろうと察した。

四―(c) アウシュヴィッツを訪問する人びと

― もう一つの疑問 ―

もう一つの別の疑問として、なぜわれわれは、アウシュヴィッツなり他の強制収容所を訪れるのか? あるいは、なぜこれほどたくさんのホロコーストの映画が作られ、多くの人がそれを見るのか? というものがある。この問いに対して、「アウシュヴィッツは世界遺産であり、そこでわれわれは人類の犯した罪を認識し、その反省を未来に役立てることができる」というよく聞く答えがあるが、これは模範解答ではあると思うが、説得力はない。だからといって、私自身もこの疑問に明確な答えを与えることは出来ない。しかしこの問いは、答えるか答えないかどちらかの問いであるのではなく、答えたい問いである。

私をはじめて強制収容所を訪ねた理由というのは、ドイツ史に関心を持つ者として、「過ぎ去ろうとしない過去」の現場を實際に見てみたかったこと、またその当時、非常勤で高校で世界史を教えていたので、現代史教育の資料収集という目的からであった。歴史教育の本としてフランスの高校の歴史教師が「二

十一世紀の子供たちにアウシュヴィッツをいかに教えるか?』⁽³⁰⁾という本を著しているのだが、この中で著者が「道徳・公民教育は、もはや歴史の授業と分けることができない」(二三頁)と述べていたことは、現場の声として、とても印象に残っている。また、ドイツ歴史家論争の際に、ハーバーマスに対して対立陣営から道徳論者という批判が向けられたのだが、しかしやはり歴史認識について論じることは道徳について論じる側面があると、私には思われる。

このように書いてしまうと、やはり歴史教育としてなのかと結論づけてしまいそうであるが、実のところ、誰がどういう人がアウシュヴィッツを訪ねているのだろうか。本稿は、フィード・ノートであるので、こうしたことについて述べるのも無益ではないと思う。だが、これは資料や統計に基づくものではなく対話に基づくものである。運転手の話によれば、アウシュヴィッツに来る旅行者で一番多いのはアメリカ人、次がユダヤ人、そして日本人だと言う⁽³¹⁾。

日本人は、一九九九年二月までポーランドの入国にはビザが必要だったし、日本人旅行者がそれほど多いとは思えなかったのも、その点を聞いてみると、日本人旅行者は大学生がほとんどで、大学が休みになる七、八月と卒業旅行の二、三月に、二、三人でやって来ると言う。もっとも、団体客はチャーターバスを利用したクシールは利用しないからだろうから目に付かないのかもしれない。ともかく、「卒業旅行」という単語を知っているのには驚いた(もちろん日本語)。実際、彼が私を「客引

き」して来た時に、私が「正規のドライバーである証明書を見せてくれ」と言うと、彼は証明書と一緒に日本人旅行者が書き残した「この人は親切なドライバーです。アウシュヴィッツとクラクフを往復して800€でした」という日本人の女子学生によって書かれた紙切れまで見せてくれたのである⁽³²⁾。確かにアウシュヴィッツには日本人のガイドがいて、依頼すれば日本人観光客のガイドをしてくれる。また日本語で書かれたガイドブックとビデオも販売されている⁽³³⁾。

アウシュヴィッツを訪れる人々は、私のような個人客をパラパラと見かける他は、団体客が殆どだった。アジアからは、一団体だけ韓国の年輩の団体客を見かけた。特に目に付いたのは、ドイツからやってきたギムナジウムのグループである。彼らは、二十人程度のクラス単位の集団で、先生とガイドと一緒に収容所を見学していた。ドイツのギムナジウムではかなりの時間をかけてナチズムについて学習するので、収容所見学もこうした授業の一貫なのだろう。運転手によると、ドイツ人の個人客はそれ程多くないそうである。ドイツ人の友人Dは、生粋のベルリンっ子で、ベルリンっ子らしいリベラルな批判精神の持ち主で、外国人排斥運動に反対し水爆実験反対など平和活動にも参加している人物なのだが、彼女をしても、強制収容所はどうしても足が向かないし行きたくないと言う。それは加害者であるドイツ人として、とても冷静には見ることができない場所であるというのがその理由であった。もちろん皆がそうかは分らない。ただしDも若いギムナジウムの生徒たちが強制収

容所を訪れることは推奨していた。

一方で、アメリカにはたくさんユダヤ系の人々が住んでいる。ナチスが政権を獲得した後に危険を感じて移り住んだ人も多いし、戦後、移住した人々も多い。ワシントンD.C.には大規模なホロコースト博物館もある。私は一九九五年に、ユダヤ・ポーランド系アメリカ人との印象的な出合いを体験した。ベルリンからブラハに行く列車のコンパートメントで、二人のジョーという名前のポーランド・ユダヤ人系のアメリカ人に出会った。彼らは、六十代なかばとおぼしき年齢で、一人のジョーの方は病気のため喉の声を切り取ってしまったていてほとんど声が出せなかった。もう一人のジョーは雄弁で、戦争中に苦難の逃亡の末アメリカにたどり着いたこと、これから戦後初めて故郷のポーランドを訪ねること、老齢の母親がポーランドに住んでいること、ポーランド語はもうすっかり忘れてしまいい全く話せないこと、せっかくヨーロッパに来たのだからポーランド以外も旅行しようと思ひストックホルムとベルリンを訪ね、今日はドレスデンを観光してから翌日ポーランドに行くこと、今回の旅行にとても興奮していること、を話してくれた。

アメリカのハリウッドでは、ホロコースト関連の多くの映画が制作されている。またアメリカでテレビドラマ『ホロコースト』が一九七八年に放映されたことが、大量殺戮を指す「ホロコースト」という単語が世界的に使われるきっかけとなった。このドラマは、ワイス一家を取り巻く収容所での出来事というヒューマン・ドラマの様相を呈していた。また空前の大ヒット

となった『シンドラーのリスト』は、ハッピーエンドとイスラエル建国を肯定する結末がさまざまな批判を呼び起こした。アメリカで制作されるホロコースト番組には、本質からのズレという評価が付きまわっている。

そこで、イエール大の学生であるオースティンが「アメリカの十代の感受性 (sensitivity)」について話していたことを思い出した。彼はアメリカで十代の銃乱射事件や犯罪が多発している背景には、アメリカ人の若者のヴァイオレンスに対する共感があると分析していた。アクション映画やポップ音楽やテレビゲームの中にヴァイオレンスが蔓延しているため、虚構と現実の区別がつかなくなり銃を手にする若者が増えているという。広島・長崎への原爆投下、ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量殺戮、ベトナム戦争、湾岸戦争。これらは自分たちが住んでいるアメリカから遠く離れた場所で行われたものであり、全く現実感が無い。そしてそれらはいずれも若者のヴァイオレンス的な欲望を満たしてくれる事例である。自分は安全な場所にながらにして世にもまれな惨劇をヴァーチャル体験させてくれるからである。

オースティンは、自分も十代のアメリカ人であり、その発言は知性のある若者らしい社会批判の精神に満ちあふれていたため、すべてを額面通りに受け取れるものではないが、強制収容所を訪問することの意味について再考させてくれた。そして、この話を聞きながら自問した。なぜ、強制収容所を訪れるのかと。アウシュヴィッツに連れて行ってくれたタクシートの運転手

からアメリカ人観光客が多いと聞かされてから、私は二人のジョーとの出会いとオースティンが言ったことを漠然と考えていた。

帰国してからのことだが、シュピーゲル誌に『朗読者』の著者ベルンハルト・シュリンクのインタヴュー記事が掲載された⁽⁴⁾。その内容は、『朗読者』の世界的な成功に対する感想と、この作品のハリウッドでの映画化の決定、ナチス・ドイツの時代を取り扱った小説であるだけにシュリンク自身の歴史認識についてであった。また、シュリンクがアメリカの人気インタヴュー番組The Oprah Winfrey Showに出演した際(一九九九年三月三十一日放送)、初めのうち、シュリンク氏に対する質問が、十五歳の少年と三六歳の女性との間での世代を越えた愛という点に集中したことも話題になっていた。『シュリンク氏の過去に同じような体験があったのではないか』、「この関係は性的な虐待ではないのか」、「女性がこうした行為を少年にするときと、男性が少女にする時とはどう違うのか」という質問がなされたようである。インタヴューでシュリンク氏は、アメリカでは当時この点が読者の話題になっていたので、オプラ・ウィンフリーもこのことから会話を始めざるを得なかったのだろうと述べ、シュピーゲル誌のインタヴューはこれを中心に据えることは主題の謝った解釈であると付け加えている。つまり、当初、ホロコーストとドイツ人の戦争責任の問題が、まったく登場しなかったのである。この小説の際だっている点は、加害者であるドイツ人の側から、戦争責任の問題を描き出そうとした

こと、そしてそれが国家とか社会といった大きな入れ物ではなく個人という最小の単位においてそれを描き出していることにあるのだが、それが抜け落ちてしまっていた⁽⁴⁾。こうした見方もあるのかと思ひ驚いた。

右記の記述だけでは、なぜ強制収容所を訪れるのか、という問いには全く答えたことにはならない。ホロコーストの学習は歴史の必須事項であるから、これはすべての人に向けられた問いである。なぜホロコーストについて学ぶのかというその意味を、今後も個人的な意味において真摯に考える必要があるという課題だけがなお残されたようである。

五 おわりにかえて

いつか、「フィールド・ノート」のようなものを、どこかに載せてもらいたいとつねづね思ってきた。このようなノートを取るようになったのは、そもそものはハンナ・アーレントのアイヒマン裁判の記録『イェルサレムのアイヒマン』の影響、後になつては三島憲一『文化とレイシズム』などの記述の影響によるところが大きい⁽⁴⁾。本稿では、「歴史の記憶」を取り扱ったが、記憶だけではなく記録に残すこともまた大切なことであると思う。記録と公表ならばホームページという、経験即発信可能なツールがあるのではないかと言われそうだが、それについては既に試みてしまった⁽⁴⁾。結論から言えば、ホームページはどこかに出かけて記録を残しているうちは楽しいのだが、通常の生活

に戻ってしまうと色褪せてしまうという即時性故の欠点を持っている。

こうしたノートを公開するのはやはり大きな躊躇いがあったが、現代ドイツの歴史認識について関心を持っているかぎり、やはり今日のドイツの状況を描き出すことは不可欠であるし、そもそもパブリック・メモリーや歴史認識というものは、個人の見識に基づくものなのであるのだからと思い直し、稚拙なものだが載せさせていただくことにした。やはり、形に残されたものをありがたがるばかりではなく、見たり聞いたりしたこと

も「思想」と呼ばれるカテゴリーに含めたいものである。

インターネットの恩恵とそれによる学問の変貌については既に少し述べたが、私自身もその恩恵を大きく受けている。疑問点があれば、関係機関やドイツに留学している知人などに電子メールで問い合わせることも出来るし、ベルリンやドイツのニュースも毎日チェックしている。また、インターネット上にあるいろいろなサイトからは常に示唆を受けている。しかし、インターネットによって方法がデジタル化したとしても、パブリック・メモリーや歴史認識がアナログ的なものであることには変わらない。それはいくらネットで書籍を注文したところで、最後に本を配達してくれるのは結局人の手であるのと同じである。デジタルを手段として用いながら、アナログ的に記録を残していくという方法はこれからも続くだろう。

なお、「四アウシュヴィッツ・ビルケナウを訪ねて」についての記述であるが、収容所内の建造物等の説明についてはすで

に多くの書籍、論文等が出されているので、それについての記録は省いた。

註

(1) アーサー・C・ダント『物語としての歴史―歴史の分析

哲学』、河本英夫訳、国文社、一九八九年、五頁。

(2) 文学という手法を用いながら哲学について論じている小説として、まず埴谷雄高『悪霊』、河出書房新社、一九七五年、があげられる。この存在論をテーマとする壮大な長編小説は、カントの『純粹理性批判』の影響の下に書かれたという。

また近年では保坂和志と笠井潔をあげることができる。『季節の記憶』、講談社、一九九六年、で知られる保坂和志は、哲学と文学の交差する点に関心を抱き続けている作家である。保坂和志『アウトブリード』（朝日出版社、一九九八年）には次のような文章がある。

「世界」の中心に「人間」がいて、そういう人間であるところの私の悩みや私と社会の相克を書くことだけが文学なのではない。科学と哲学は、人間と世界の配置を劇的に換えた。科学と哲学との連関を失ったら文学が書かれ読まれる意味はないと僕は思う。『季節の記憶』を書きながら僕はずっとそれを考えていた。(二四七頁)。

また推理小説家の笠井潔も哲学に深い関心を抱いている作家の一人である。『哲学者の密室（上）（下）』、光文社、一九九二年。この小説はハイデガーのナチ疑惑をテーマとして、哲学と死について語られている。マルティン・ハイデガーと目されるマルティン・ハルバッハ教授、レヴィナスと目されるエマニュエル・ガドナス教授、学生時代にハイデガー哲学に大きな影響を受けて親衛隊将校になったハインリヒ・ベルナーらが主な登場人物として登場する。最後にハルバッハは哀れな転落死を遂げる。

そして言うまでもなく、ウンベルト・エーコーやミラン・クンデラの主題小説は、まぎれもなく哲学や思想を取り扱っている。

(3) 哲学・思想の専門家が、物語的手法で哲学について論じているものとして、永井清『翔太と猫のインサイトの夏休み―哲学的諸問題へのいざない』、ナカニシヤ出版、一九九五年。笹澤豊『小説・倫理学講義』、講談社（現代新書）、一九九七年。富田恭彦『哲学の最前線―ハーバードより愛をこめて』、講談社（現代新書）、一九九八年、など。

『ソフィの世界』と同様のテーマを扱っている本として、Nora K./Vittorio Hösle, *Das Café der toten Philosophen. Ein philosophischer Briefwechsel für Kinder und Erwachsene*, München (Beck), 1998.（日本語訳は浅見昇吾訳『哲学者のカフェ―世界を生きたるための子どもと大人の往復書簡』、河出書房新社、一九九九年）。ただしこちらは哲学者とド

イツのギムナジウムに通う女学生とのノンフィクションの文通という形式を取っている。もともとは高校の哲学教師であり、現在是他分野にわたる小説を発表している『ソフィーの世界』の作者であるヨースタイン・ゴルデルはこの両方の境界に立っていると言える。

(4) G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*, Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1971, S. 29.

(5) 例えば、中島義道は、『哲学の教科書』、講談社、1995年、第二章「哲学とは何でないか」において、思想史や文学を哲学ではないと痛烈に批判している。

また、永井均は、『ソフィの世界』を「私は『ソフィの世界』を哲学の本だとは認めない。あれは、物語に絡めた思想史の本にすぎない。思想史は決して哲学ではない」（『翔太と猫のインサイトの夏休み―哲学的諸問題へのいざない』、ナカニシヤ出版、一九九五年、二十七頁）と述べている。

(6) 精神科学の成立史については以下の論文に詳しい。三島憲一「精神科学における生活世界の隠蔽と開示（上）―十九世紀における精神科学の成立―」、岩波書店『思想』六八八号、一九八一年。「精神科学における生活世界の隠蔽と開示（中）―十九世紀における精神科学の成立―」、岩波書店『思想』七十七号、一九八四年。「精神科学における生活世界の隠蔽と開示（下）―十九世紀における精神科学の成立―」、岩波書店『思想』七二六号、一九八四年。

(7)

『思想』六二八号(一九七六年十月号)、岩波書店、一九七六年。なおこの論文は、良知力『向こう岸からの世界史——一つの四八年革命史論』、ちくま学芸文庫、一九九三年、に所収されている。

(8)

鷺田清一が最近提唱している臨床哲学はこうした「高尚」な一般原理の確立を目指す哲学を抜け出す試みの一つである。鷺田清一『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』、TBSブリタニカ、一九九九年。

(9)

これについては、小林正文『ヒトラー暗殺計画』、中央公論社(中公新書)、一九八四年、に詳しい。

(10)

トリッティン(Jürgen Tittin)は、最近頃に現実路線の傾向が強まっている緑の党の中で、左派に属し、原発反対などの環境保護派として知られている人物。

(11)

追記。滞在中、外務大臣であるフィッシャー(Joschka Fischer)をテレビで見る機会が多かった。フィッシャーは以前から緑の党の「顔」として有名であったのでもちろん顔は知っていたが、以前と比べずいぶんと痩せていたことには驚いた。はじめは病気なのではないかと思つたのだが、どうやらジョギングとりんごダイエットによつて大幅に減量したらしい。フィッシャーはこのダイエットによつて、自己を律することができる人間という好イメージの確立に成功したそうである。

(12)

この裁判に対して、欧州司法裁判所は二〇〇一年一月十一日、一部の後方勤務を除き女性の兵役を禁じたドイツ基

本法が、男女同権を定めた欧州連合指令に違反するとの判決を下した。ドイツ連邦軍は、総勢三万人のうち二万五千人までが男性であり、他のヨーロッパ主要国と比較すると著しく女性兵士の割合が少ない。

(13)

追記。ベルリンへの首都移転は、東西ドイツ統一の直前の一九九〇年八月に、東西両ドイツ政府によつて調印されたドイツ統一一条約によつて決まっていたが、一九九一年六月に連邦議会での移転決議で正式に決定した。ただし、この決議の結果は、賛成三三七票、反対三二〇票であり、すんなり決まったわけではない。

(14)

これについても多くの議論があつた。つまりこの一帯はナチス時代に政治の中核であつた場所であり、ここを新首都ベルリンの中心とするということは、当時使われていた多くの建物を再利用することになるからである。しかし結局は費用の問題から、ベルリン郊外への政教地区建設は見送られ、この一帯を再利用することになった。

(15)

ドイツ史におけるポツダム広場については、例えば以下の文献を参照。Ulrike Plevnia u. a. *Der Potsdamer Platz. Eine Geschichte in Wort und Bild, Berlin* (Nishen), 1991.

(16)

Reichstag は、もともとは、一八七一年のドイツ帝国成立後に建造された、ドイツ帝国議会議事堂の意味。今日なおReichstag という名称が用いられている。

(17)

Reichstag が完成したのは一八九四年のことであり、ドイツ帝国の成立から十四年も経つてからのことであつた。こ

れは第二帝政期における議会軽視の姿勢を顕著に示している。Reichstagは誕生当時から波乱含みの存在であった。

- (18) この展覧会の詳細は以下のホームページで見ることができ。URL: <http://www.dhm.de/ausstellungen/erf/>

この展覧会の公式パンフレットは、Deutsches Historisches Museum, Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland, Kunst und Ausstellungen der Bundesrepublik (Hg.), *Einigkeit Wege und Recht und der Freiheit Deutschen 1949-1999*, Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag), 1999.

- (19) 六八年世代については例えば以下の文献を参照。Rolf Uesseler, *Die 68er: "Macht kaputt, was Euch kaputt macht"*, München (Wilhelm Heyne Verlag), 1998.

ドイツ統一に関することはさまざまな文献があるが、次の文献はむしろ有益。Hans Hermann Hertle und Kathrin Elsner, *Mein 9. November. Der Tag an dem die Mauer fiel*, Berlin (Nicolaische Verlagsbuchhandlung Beermann GmbH), 1990.

- (21) Bundeszentrale für politische Bildungの住所は、Anhalter Str. 20, 10963 Berlin-Kreuzberg。ドイツの歴史に関するさまざまな資料(書籍、CD-Rom、ビデオ)を無料で入手できる。

- (22) Frank Schirrmacher hrg., *Die Walsen-Bubis-Debatte. Eine Dokumentation*, Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1999, S.11ff.
- (23) なお、ホロコースト記念碑とユダヤ人博物館は、その敷

地内に追悼のための石柱を二千本も建てるように設計されている。この石柱は墓石を意味するものであり、ベルリンの中心に、「過去の巨大な墓場を出現させるのか?」ということを通じて、「ホロコースト慰霊碑論争を呼んだ。もと

- (24) Ibid, S.111.

- (25) Ibid, S.253. *Die Walsen-Bubis-Debatte* におけるこのタイトルは、「犯罪ではなく恥を証明するもの。良心は自らの内

面的孤独である。野次」というもの。フランクフルター・アルゲマイネ紙に一九九八年十一月二八日に掲載された。

- (26) "Moral verläßt nicht" In: *Der Spiegel*, Nr.49/1998 (dem

30. Noe. 1998), S.50-54.

- (27) Ibid, S.187ff, S.113ff.

(28) 歴史家論争以後も、一九九六年にゴールドハーゲン論争と呼ばれる大論争があったが、これは直接的にはドイツのバブリック・メモリーをめぐる論争ではなかった。なお、ゴールドハーゲン論争とは、ハーバード大学の政治学者ゴールドハーゲンが、著書『ヒトラーの自発的死刑執行人 普通のドイツ人とホロコースト』(Daniel Jonah Goldhagen, *Hitler's Willing Executioners: Ordinary Germans and the Holocaust*, Random House, 1996.)ドイツ人のユダヤ

人に対するドイツ人の敵対的な認識がホロコーストを生み出したと発言したことに端を発する論争。

「ヴァルザーVSブービス論争」は、歴史家論争と同様、メディアを舞台として、ドイツのバブリック・メモリーをめぐる大論争になった。日本でもこの論争は特別番組で放送された。一九九九年十二月十一日放送、NHK教育ETVカルチャースペース「ホロコーストといかに向きあうか?」。

歴史家論争は、一九八〇年代終わりの東ヨーロッパの政変とそれの一翼となったベルリンの壁崩壊とドイツ統一の興奮のあおりを受けて一気に忘れ去られていったが、バブリック・メモリーをめぐる論争が終結したわけではない。次の文献を参照。“Verwilderung der Sitten. Debatten: Neuauflage des Historikerstreits?” In: *Der Spiegel*, 19. Juni 2000 (Nr.25), S264-265.

(29) シュピーゲル誌とのインタビュー。“Scharfzüngiger Geschwister-Scholl-Preisträger Peter Gay”, In: *Spiegel Online*, 24. Nov. 1999. 詳細は URL: <http://www.spiegel.de/druckversion/0,1586,53623,00.html> で見ることが出来る。

(30) Mahnen und Gedenken im Bayerischen Viertel, Bayerischer Platz, Schöneberg, Bayerisches ViertelのMahnen und Gedankenについてはこちらのホームページを参照：
<http://www.luiseberlin.de/bms/bmstext/9804delta.htm>

(31) Die wichtigsten Gedenkstätten und Mahnmale (URL:<http://www.berliner-morgenpost.de/archiv1998/980809/berlin/>

story215871.htm)。

(32) 最後の二つの地名「Trostenez, Flossenbürg」は新しく加えられたのではないだろうか。この二つの地名が書かれてあるプレートは新しくたし、一九九三年と一九九五年にここを訪れた際には、この二つを見た記憶がない。

(33) また「Trostenz」はポーランドのバルト海沿岸にあった強制収容所「Flossenbürg」はチェコとバイエルンの国境付近にあり（チェコ領）、チェコスロヴァキア人用に作られた収容所である。

ピーター・ゲイは「*Meine Deutsche Frage. Jugend in Berlin 1933-1939*, München (Beck), 1999. オリジナルは英語で書かれていて、タイトルは *My German Question. Growing up in Nazi Berlin*, Yale University Press, 1998. を著し、この作品で、1999 年度のシェル兄妹賞（シュンヘン）を受賞した。この発言は、前述のシュピーゲル誌とのインタビューでのもの。この受賞の際に、シュピーゲル誌とのインタビューに答えたもの（註）を参照）。

(34) “Ich lebe in Geschichten”, In: *Der Spiegel*, 4/2000 (den 24. Jan. 2000), S.180-184.

一九九九年六月、ホロコースト記念碑の建設が連邦会議で決議された後も、ホロコースト慰霊碑論争は止まず、その後もインタビュー等でホロコースト記念碑についての見解を識者に問うことは依然続いている。その傾向がこのインタビューにもあらわれている。

(35)

ナチスによる収容所は、Konzentrationslager（強制収容所）と Vernichtungslager（絶滅収容所）と区別されている。しかし強制収容所という呼び名の方が一般的であると思われるので、以下では主として強制収容所という表現を用いた。

(36)

証言が大きな意味を持つという意味で、クロード・ランズマン監督の九時間半におよぶ映画『ショアー』（一九九五年）はさまざまなことを教えてくれる。これについては例えば以下の文献を参照。クロード・ランズマン『SHOAH』、高橋武智訳、作品社、一九九五年。鵜飼哲＋高橋哲哉編『〈ショアー〉の衝撃』、未来社、一九九五年。高橋哲哉『記憶のエチカー戦争・哲学・アウシュヴィッツ』岩波書店、一九九五年。鵜飼哲『抵抗への招待』、みすず書房、一九九七年。鵜飼哲『償いのアルケオロジー』、河出書房新社、一九九七年。

(37)

ベルンハルト・シュリンク『朗読者』、松永美穂訳、新潮社、二〇〇〇年、一四六頁以下。

(38)

電車は、クラクフ中央駅からの直通はないが、クラクフ・プシヨワ駅からならオシュフィエンチム駅に停車するローカル列車があるので（カトヴィツェ方面行き）、それを利用することもできる。

(39)

ジャン＝F・フォルジュ『二十一世紀の子供たちにアウシュヴィッツをいかに教えるか？』、高橋武智訳、作品社、二〇〇〇年。

(40)

ここでユダヤ人という表現は、イスラエルおよび世界中に在住しているユダヤ系の人という意味で使われている。

(41)

現在のポーランドで「白タク」がはびこっているというのは有名な話。これ以外にもクラクフで同じような日本人旅行者が書いた紙を持っていたドライバーに会った。

(42)

ビデオはアウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館作成（一九九五年）のもので六三分。

(43)

註(34)を参照。

(44)

これについては、拙稿「読書における解釈の自由——Bernhard Schlink, *Der Vorleser* の多様な読み方——」、「高専ドイツ語教育第三号」、高専ドイツ語教育研究会発行（郁文堂制作）、二〇〇〇年、でまとめた。

(45)

ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』、みすず書房、一九六九年。三島憲一『文化とレイシズム——統一ドイツの知的風土』、岩波書店、一九九六年。

(46)

これについては、拙稿「ベルリンで高専ドイツ語教育について考えたこと」、「高専ドイツ語教育——高専ドイツ語教育研究会三十周年記念論文集——」、同学社、二〇〇〇年、でまとめた。

（しばた・いくみ）

国立木更津工業高等専門学校・人文学系専任講師